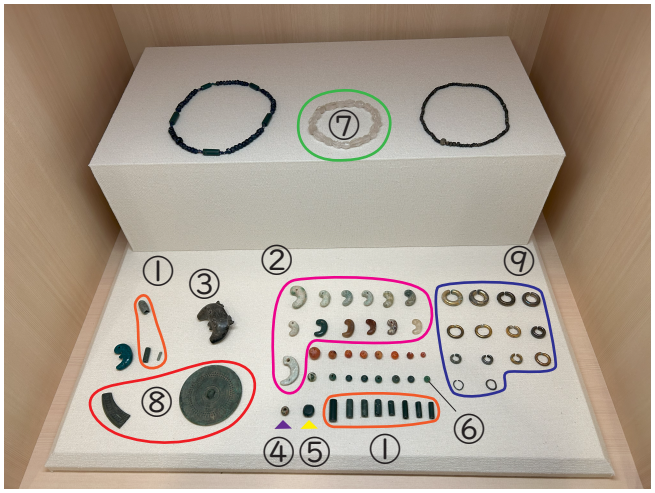
④各地からもたらされた古代人のアクセサリー

古くは縄文時代より、人々を魅了してきた装飾品ですが、それらの多くは特定の地域で生産され、流通したものでした。石製の玉類であれば、ヒスイは新潟県、メノウは島根県など石材の産地から、鏡は中国や日本国内の鏡の製作地など、製品あるいは製作技術や材料がそれぞれの地からもたらされています。特に、ガラス製の玉類の中で珍しいのは、中東や地中海沿岸で生産された「雁木玉」で、シルクロードを経て、鳥栖の地に入っています。

「耳環」という耳飾りは古墳の副葬品として多く出土しています。環にした鉄地の上に鍍金を施したもので、渡来人によって朝鮮半島から技術や製品が伝えられ、日本で製作されるようになります。

展示資料について



①管玉：細長い管のようなもので、碧玉や緑色凝灰岩で作られることが多い

②勾玉：縄文時代の牙製勾玉以来の歴史がある

③子持ち勾玉：大型の勾玉の周囲に複数の小型勾玉がついたもの

④雁木玉：ガラス製の玉で、表面に生地の色とは別のガラスの糸が縞状に入る

⑤平玉：円盤状の形をしていて、碧玉や水晶で作られることが多い

⑥丸玉・小玉：古墳時代の玉類で、ガラス製が多いが、石製のものもある

⑦切子玉「連」：島根県で作られた水晶製の切子玉のみで構成されている

⑧銅鏡：中国製の鏡を模倣して製作した日本製の鏡

⑨耳環：鉄地に鍍金を施した耳飾り